与　論　島

あたい妨(さまだ)き

唄・三味線：川村　俊英

詞章１

＊２番以降歌詞のみ

あたいさまヨだきやヨー
がじまヨるぬえゆだヨー
がじまヨるぬえゆだヨー
ぴちゅぬさまヨだきやヨー
なるなヨるなゆかなヨー
なるなヨるなゆかなヨー
ヤースリスリー　ヤレシタリヌスーリー
タダースリー　ヤレスーリースリー

共通語訳

あたい（屋敷側にある畑）の妨げ（邪魔）になるのは、ガジュマルの枝です。ガジュマルの枝みたいに、人の妨げになるようなことをしてはいけませんよ、かな。

※「かな」は一般に「愛しい人」のことを指しますが、親しい人に呼びかける場合も使います。

詞章２

さやかてるちきに　にわいでてみりば
はなしゃるさとが　ふとどむゆる

共通語訳

美しい月を見ようと、庭に出てみれば、愛しいさと（恋人）のことばかりが思い浮かびます。

詞章３

あたいしょうじがきや　ぱなぬはきなゆい
わぁはきなてたぼり　はなしさとぅめ

共通語訳

あたいの防風垣は、庭の花を守る垣根になります。私の垣根になってください。愛しいさとめ（恋人）よ。

※「さとめ」は主に、女性側からいう男性の恋人です。

曲目解説

「人の妨げになるな」という教訓歌を打ち出しとした唄です。奄美には「唄半学」という言葉があって、唄を覚えれば、学問の半分をやった価値がある、という言葉があるのですが、正にその典型的な文句ともいえます。かつて島唄といえば、集落の人たちが何人かよれば、たちまち始まった唄遊びで歌われた唄です。今は想像できませんが、唄遊びは若い人たちの社交の場でもあって、これを通して結ばれるカップルも少なくなかった、といわれます。唄を聞けば、その人の人柄も、知恵の浅さ、深さも分かりますから、ある意味、配偶者の理想的な選択方法だったのかもしれません。

唄遊びには、年配の人の出番もありました。唄で、若い人たちを教育するということです。まともにお説教されても聞く気がおこりませんが、唄だとジーンと胸にしみ込んでくるということが多々あったに違いありません。「あたい妨き」の歌詞なども、言いたいことはありきたりの常識ですが、ガジュマルが出てくる、この比喩はウーンとうなってしまうほど見事です。

この唄の歌唱者、川村俊英さんは、自著『与論島の民謡と民俗』のなかで、『この歌詞の「あたい」は足戸村（今の大字朝戸）のことであり、与論の最も古く出来た集落でした。同時に「あたい妨き」の発祥地と思われる』と書いています。

歌唱者

川村　俊英（かわむら　としひで）大正４年生まれ。与論町那間出身。

五尺（ぐしゃく）ヘンヨー（へんよー）

唄・三味線：池田　直峯

詞章１

＊２番以降歌詞のみ

ぐしゃくヘンヨークヌてぬぐいや
ソレ　ぐしゃくてぬぐいや
ソレ　なかにマタすみて
ササー　ヨイヤナー

共通語訳

五尺の手拭の、中を染めました。

※１尺は３０．３センチほど。

詞章２

すみむぬすみたしが　むらさきいるすみて

共通語訳

染物（五尺手拭）を染めましたが、紫に染めました。

詞章３

いちょうきながはまに　うちゃいひくなみや

共通語訳

いちょうき（地名）の長浜に、打ち寄せたり引いたりする波よ。

詞章４

あがさみやらびぬ　みわれはぐき

共通語訳

あがさ（地名）の女童（みやわらべ　乙女の意味）のほほえむときの歯茎のようです。

詞章５

いしゅちゅみぬぱんた　なちぐりぬさがて

共通語訳

石積半田（いしゅつみぬぱんた　地名）に、夕立ちが降りました。

詞章６

なちぐりやあらぬ　どしがなみだ

共通語訳

あれは夕立ちではありません。愛しい人の涙です。

※「どし」は「同士」、つまり友人を指すことが多いのですが、愛しい人のこともいいます。

曲目解説

この唄は、奄美のみならず沖縄にまで伝わっている本土系の曲と思われます。江戸時代に編集された歌謡集「落葉集」のなかに、「五尺手拭」という唄の文句が載っていますが、それをみるとよく分かります。(『日本民謡大辞典』〈浅野健二編　雄山閣出版　昭和５８年刊〉参考)

〇五尺いよこの手拭　五尺手拭中染めて

〇俺にいよこの呉りょより　俺に呉りょより宿に置け

与論のこの唄の場合は、下の句は別の文句になっていますが、歌詞は、

〇五尺ヘンヨークヌ手拭や　五尺手拭や中にマタ染めて

のように、「いよこの」が「ヘンヨークヌ」に変わっただけのものといえます。「いよこの」と「ヘンヨークヌ」はかなり違うといえばいえますが、歌い継がれる間に「いよ」が「ヘンヨー」に、「この」が「クヌ」に変わった可能性は十分考えられるのではないでしょうか。

実は、奄美には江戸時代、本土の流行歌が思いのほか移入されて、それがすっかり奄美化した唄がこのほかにもあるのです。そのことを知ってもらうためにもこの唄は貴重なものです。

島唄の価値は、古い要素を今日に伝えてきたということも大いにありますが、本土や沖縄から入って来た唄を貪欲に取り入れ、すっかり奄美の唄にしたというところにもあるようです。

歌唱者

池田　直峯（いけだ　なおみね）昭和２７年。与論町那間出身。

塩川（しごー）の中棚（なかだな）

唄・三味線：池田　直峯

詞章１

＊２番以降歌詞のみ

しごーぬなかだなや
うちゃがてどみゆる
ヘンヤー　ヌガヤルヘン
ウシ　あすでうちゃがいる
しごーぬぱんた
ウシヘンヨー　ヌガヤルヘン
マタガルヘイヨー　ヌガヤルヘン

共通語訳

塩川（地名）の中棚（洞窟の中の棚状の広場）は、浮き上って見えます。
遊んで心浮き浮きする所は、塩川のぱんた（地名）です。

※島唄に出てくる「遊び」多く「唄遊び」を意味します。

詞章２

いひゃぬななぱなり　うちゃがてどみゆる
あすでうちゃがいる　わちゃがあしび

共通語訳

伊平屋島（現在沖縄県に属する島の名）の七ぱなりが、浮き上がって見えます。遊んで心が浮き上るのが、私達の遊びです。

※「七ぱなり」は、与論島からみて、山がギザギザに7つ見える様をいいます。

詞章３

しごーぬなかだなや　わがはゆてあたん
わがはゆいぬやっしゃぬ　のだきまち

共通語訳

塩川の中棚に、私はよく通っていたものです。
今は私が通うのも少なくなり、のーだき (雑草の一種) が生えてしまいました。

※中棚の唄遊びに行けなくなった、というのと、そこにあるお墓に参ることが少なくなったことを歌っているという説があります。

曲目解説

曲名の「塩川の中棚」は、「珠壕中棚」（発音はどちらも「しごーぬなかだな」）と表記されることもあります。海辺にハミゴー（神壕）といわれる洞窟があって、その中が広場になっており、かつては島の人々がここにご馳走を持って寄り会い、唄遊びを行ったようです。打ち出しの歌詞を聞くとそのことがよく分かります。

ところで、この唄は、奄美大島や徳之島、沖永良部などにも残る「諸鈍長

浜節」とつながりある唄だという説があります。「ヘンヤ　ヌガヤヌヘン」などというハヤシコトバが、「諸鈍長浜節」につく「ヒヤルガヘー」「ヘンヤルガヘー」などと近いことからも、そのことは確かのようです。

「諸鈍長浜節」は、加計呂麻島の諸鈍集落の長浜の美しさや、諸鈍の女童めわらべ　乙女の意味）を讃えた唄ですが、それが奄美全域に伝わり、与論島では「塩川の中棚」に変身したと考えられます。

ついでながら、琉球王朝で育まれた古典音楽の中にも「諸屯（しゅどん）節」がありますが、この曲と「諸鈍長浜節」が同系統であることも分かってきました。もともと唄というのは、このように移動し、その土地に同化していくという性格を持っていると言えましょう。

歌唱者

池田　直峯（いけだ　なおみね）昭和２７年生まれ。与論町那間出身。

昔（むかし）いきんとう

唄・三味線：若松　ナヘ

詞章１

＊２番以降歌詞のみ

むかしうむいじりば
とぶばかいどあしが
ぐしゃくあるわーどない
ぱにぬちかじ　スーリ　ウリウリ

共通語訳

昔のことを思い出すと（懐かしくて）、（その時代に）飛んで行きたいのですが、５尺ある私の身体には、羽がないのです。

※１尺は、３０．５センチほど。

詞章２

ぐしゃくあるわぬない　ぱにちきゅんえりばど
しぐちいえるうやぬ　あいどしゃびゅる

共通語訳

５尺ある私に、羽が付くのでしたら、亡くなった親にも会えるはずです。

詞章３

みんぎぬやぱるぬ　たまいみじぐくる
ひゅあしびあっちゃや　しにゅるいぬち

共通語訳

人間は野原の溜まり水のようなもの。今日遊んでいても明日には、死ぬかもしれない命です。

詞章４

ひゅあすであっちゃや　しにゅるいぬちむちゅて
どしときむぐぱさ　むとなどしんちゃ

共通語訳

今日遊んでいても、明日は死ぬかもしれない命を持って、友に心を閉ざさないでください。友人たちよ。

曲目解説

「いきんとう」は、与論と沖永良部の代表曲といってよいものですが、与論島では曲調や、唄の目的によってただの「いきんとう」、「昔いきんとう」「上ぎいきんとう」「下ぎいきんとう」「道いきんとう」に分けられています。「昔いきんとう」は「昔風のいきんとう」ということでしょうが、沖縄の古典音楽も「遊び諸屯節」とか、「早作田節」とか、頭につくことがありますから、その影響と思われます。

「いきんとう」の意味については、池のほとりでよくやる唄遊びでこの唄が歌われたためだと、沖永良部ではよくいわれていますが、与論島では、大飢饉にあった年、生活が苦しくなり「いちゃし　いきち　いきゅんらが」（どうやって生きていこうか）という嘆きの言葉から生まれた曲名だ、という説

が知られています。（川本俊英著『与論島の民謡と民俗』参考）

確かに、「いきんとう」は、「アンチャメグヮ」（本集沖永良部に掲載）などに比べて、静かで、哀しい感じがしないではありません。また、ここに歌われている歌詞を読んでも、あまり明るいものではありません。とはいえ、まだこの説については研究の余地があるように思います。

沖永良部でも昔から歌われていますので、両島で協力しながらその意味を考えていくことが必要でしょう。

歌唱者

若松　ナヘ（わかまつ　なへ）大正１１年生まれ。与論町茶花出身。

与論小唄（よろんこうた）

唄・三味線：岩山　栄勝

詞章１

＊２番以降歌詞のみ

このはみたいな　わがよろん
なんのたのしみ　ないところ
すきなあなたが　おればこそ
いやなよろんも　すきとなる

共通語訳

訳略（共通語の歌詞であるため。以下同じ）

詞章２

わたしがあなたを　おもうかず
やまのきのかず　ほしのかず
さんぜんせかいの　ひとのかず
せんりはまべの　すなのかず

共通語訳

訳略

※「さんぜんせかい」（三千世界）は、仏教用語で広い広い世界のことです。

詞章３

おもいこんだる　どしとなら
いしがくだけて　はいなるも
はいがさくらに　かわるとも
ふたりのやくそく　かわしゃせぬ

共通語訳

訳略

※「どし」は「友人」の意味ですが、「恋人」も含まれます。

詞章４

もしもねがいが　かなうなら
ゆりのはまべに　いえをたて
すきなあなたの　ひざもとで
せんねんもまんねんも　くらしたい

共通語訳

訳略

曲目解説

「与論小唄」は島唄といっても、そのなかの「新民謡」のジャンルに入れてよいかもしれません。作詞者、作曲者は分かってはいませんが、言葉も曲調も伝承的な島唄とはいくぶん違って、とても新しく感じます。与論の人たちは年齢を超えて誰もがこの唄が好きです。

沖縄の唄として、全国的に有名になった「十九の春」のもとが、実は「与

論小唄」だったという説が有力です。また、「与論小唄」のもとが、明治末期に、日本中に流行した「ラッパ節」であったことも、今でははっきり証明することができます。

「ラッパ節」とは、東京在住の添田唖然坊という演歌師が明治38年に初めて作って発表した唄です。７５７５７５７５調の今様調といわれる詞形で、歌詞のすぐあとに「トコトット」というラッパの音を現したハヤシコトバが付いていて、これがまた評判でした。

沖縄の民謡研究家、仲宗根幸一さんは、明治末期、与論島から多くの人が九州の炭鉱に出稼ぎに行った時代があり、そのときに「ラッパ節」を覚えてきて、与論に広めたといっており、今はそれが定説のようになっています。与論島では近年まで「与論ラッパ節」も伝えていました。ですが、この唄には「トコトット」というハヤシコトバはありません。ただ、詞の形や言葉遣い、詞の内容には、「与論小唄」「十九の春に」に繋がるものが感じられます。

歌唱者

岩山　栄勝（いわやま　えいかつ）昭和３９年生まれ。与論町立長出身。